



# 恋のレシピ



愛乃 祥

ドカーーーーーン！！

もの凄い爆発音と共に我が校の調理実習室はボロボロになった。

生徒や先生が慌ててかけつける。

「大丈夫か」「なんだ今の爆発!？」

そんな騒ぎ声中、担架で運ばれる少女が1人。

そう、私、秋野美穂だ。

今日は調理実習で居残りさせられ、オムライスを作っていた。

多少のコゲは気にしないとタマゴをフライパンの中に入れたときに私は気付かなかった。

フライパンに大量の油が入っていることに。

大きな爆発だったのか学校が騒がしい。

あ～・・・またやっちゃた。

そう、私は調理実習が大の苦手です。居残りをさせられていたのだ。

で、先生がいない内にこっそりタマゴ焼いちゃえ！と思ったのが運のツキ。

どうやら、別のクラスで揚げ物をしていたらしくて、その調理油の中に入った油に気づかず

投入してしまったというわけだ。

「ん・・・。」

うっすらと意識が冴えてくる。保健室からの風が気持ちいい。

「オイ。」

「オイ」

その心地の良い重低音で目を開けると

「調理実習室をあんなにしたのはお前か」

あれ？たしか、彼は同じクラスの・・・

「竹村くん？」

そうだ、同じクラスの竹村誠くんだ。

クールでカッコよくて女子に人気の彼がなぜここに？

「だから」

竹村くんはそう言うと私の頬をつねった。

「調理実習室をめちゃくちゃにしたのはお前かって聞いてるんだけど？」

「ふ．．．ふあい。（はい）」

「やっぱりお前か」

「え？竹村くん・・・」

私のこと知って

「俺にとってのブラックリストだからなお前。」

ブラックリスト！？

「どうしてどうして！！？どうしてブラックリストなの？普通気になる子とかそういうリストじゃ」

「調理実習室を地獄絵図に変える女がそんなリストに入るかつ！」

「う・・・」

「他校でも有名だぞ。お前が厨房に入ったら爆心地に変わるって。」

そういうとやっと竹村くんはつねっていた頬を開放してくれた。



「とりあえずだ、秋野。俺的にお前のその料理のセンスは許せない。」

・・・返す言葉もありません。

「だから、特訓する。」

・・・え？

「あの、特訓って。」

「お前が調理実習室を爆心地にしないために特訓する。」

「料理教室に行けてこと？」

「ダメだ。他の人が巻き込まれる」

「じゃあだれか調理師さんでもついててもらうの？」

「ったく、気づけよ。」

竹村くんはがっくりうなだれる。

「俺が、お前の料理がちゃんとしたものになるまでついててやる。」

え？竹村くんが？

「なんだよ、その嫌そうな顔」

「・・・だって、絶対に厳しいでしょ。」

「あのなあ！お前悔しくないのか？バカにされて、今までだってヘラヘラ笑ってごまかしてきたんだろ！」

「そんなの・・・どうして竹村さんにそこまで言われなきゃならないの!？」

思わず反論してしまった。

「お前に、料理を嫌いになってもらいたくない。それだけだ」

「え、それって」

「とりあえず明日放課後！調理実習室集合だ！いいな。」

「う、うん……。」

「俺は

「やり直し！」

あの日から竹村くんと私は放課後毎日のように調理実習室に入り浸るようになった

「塩と砂糖を間違えるヤツがあるか！」

「焦がすまで見ているだけかお前は！」

「おい！変な煙がたってるぞ！！」

とまあこんな具合に毎日奮闘しております・・・。



にしても、竹村くん毎日来てくれるんだよなあ。

なんでこんなに私なんかのために必死なんだろう。

でも、料理をしている彼の姿はかなりカッコイイ。

本気で料理好きなんだなあ。

まっすぐに調理をする彼の姿は輝いてみえた。

「ねえ、竹村くん」

「なんだ」

「竹村くんは将来は調理師さんになるの？」

「将来のことだからわからないけれど、目指してる。」

「そっかあ、夢があるんだね」

「秋野、お前にはないのか？」

「うん、なんか適当にまわりに合わせて適当にしてるから。」

「本当に何も考えてないんだな」

「でもね、竹村くんに会って、私も夢を見つけたいと思えるようになったの。」

竹村くんは少し驚いた顔をして、頬を染めた。

「ありがとう。」

そして帰り道、竹村さんと別れた時に事件が起きた。

「ねえ、あなた。」

後ろから声が聞こえる。

振り向くとそこには1人のキレイな女の子がいた。

制服からいくと同世代かな。

「なんですか？」

「あなたは、竹村さんと付き合ってるの？」

「は？いえいえいえいえ！ ないです！！」

「嘘よ！ あなたと竹村さんが最近調理実習に2人きりで入っていくのを見たの。」

「それは」

「毎日毎日何をしてるの？」

い・・・言えない！調理の特訓してることは内緒だから言えない・・・。どうしよう。



「言えないってことはそれだけやましいことしてるってワケ？」

「あの、話を」

そう言った瞬間彼女の持っているものに気付き血の気が引いた。

「出刃・・・包丁・・・。」

「そうよ！私は本気なの！あんたなんかに竹村くんは渡さないから！」

ヤバイ・・・、これ、本当にピンチだ。

まわりに人影もない。どうしよう。

スパッと制服が切られる。

「竹村くんのご事は諦めなさい！」

そんな彼女の行動よりも調理するための包丁で人を傷つける彼女が腹立たしくもあり、悲しくもあった。

「ゴメンネ」

そう言うと、私はその少女を投げ飛ばした。

そう、私は武術を徹底的に仕込まれて育ったから包丁なん簡単に振り落とせる。

女の子はうなだれる。

「ねえ、あなたが竹村くんを好きなら、もうこんなことしないで。」

「でも……。」

「包丁は人を傷つけるための物なんかじゃない。料理で人を幸せにするものなんだよ。」

そっか・・・、竹村くんはずっとこれを伝えたかったんだ。

女の子を去らした後に気づいた

武術で育った私にとって刃物は敵だった

人を不幸にするためのものだった

でも、そうじゃない。

包丁は、人を幸せにするためのツールなんだと

その時、私は初めて理解した

そして、竹村くんに恋をしていることも同時に。

「お！やるじゃないか！」

その事件の後に私は驚くほど、料理が上達した

食べ物への感謝、食べてくれる人へ愛情を持って作る

ただ、これだけのことで料理はここまでも上達する。



それを教えてくれたのは

「ねえ、竹村くん」

間違いなくアナタ。

「好きです。」

END